言語研究（*Gengo Kenkyu*）**167**: 55–77（2025）　doi: 10.11435/gengo.167.0_55

飯塚市方言におけるモダリティを表す『トル』

小　川　晋　史
熊本県立大学

【要旨】西日本各地の方言に『トル』で総称されるアスペクト形式が見られることは多くの先行研究が明らかにしているところである。本稿が対象とする福岡県の飯塚市方言にもアスペクトを表す『トル』が見られるわけだが，それに加えて，モダリティを表す『トル』がある。モダリティを表す『トル』は形容詞またはコピュラに後接して，過去の事態に対する断定的判断の意味を表す。そして，典型的なモダリティ形式の特徴を備えている *。

キーワード：飯塚市方言，トル，モダリティ，アスペクト

1. はじめに

西日本の広い範囲にいわゆる『ヨル』と『トル』で総称される方言形式が分布しており，アスペクトの対立をなしていることが知られている（国立国語研究所（編）1999，工藤 2004，など）。本稿で扱う福岡県飯塚市方言（以下，飯塚市方言）でも同様の対立が見られる。例文を共通語訳とともに（1）に示す。なお，本稿では例文とグロスの提示方法として下地（2020）が言うところの「標準 3 段方式」に準拠しつつも 1 段目にカタカナによる音韻表記（表層）を足した 4 段方式の表記を採用している [1]。1 段目の例文のカタカナによる音韻表記の列では『ヨル』および『トル』相当の形式に下線を引いて示すことにする。また，例文とグロスでの漢字使用は共通語と同じ読みをする場合に限る。総称としての『ヨル』と『トル』は二重鉤括弧に，具体的な方言形式である「ヨル」や「チョル」は鉤括弧に入れて区別する。

* まずは，話者に感謝申し上げる。本稿の内容は日本方言研究会第 112 回研究発表会（2021 年 5 月 22 日，オンライン）で口頭発表した内容に加筆・修正したものである。JSPS 科研費（課題番号 JP21K00484）の助成を受けた研究成果の一部，国立国語研究所の共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」（代表：山田真寛）による研究成果の一部を含む。研究会など口頭発表の場では多くの方々からコメントを頂いた。特に，九州大学の下地理則氏のゼミにおける研究会での議論から多くを学んだ。松岡葵氏からは資料情報なども頂いて大変にありがたかった。また，匿名の査読者 2 名から頂いたたくさんのコメントは，その全てが建設的なものであって，本稿の内容の充実と筆者の勉強にも繋がるものばかりであった。1 つ 1 つを挙げることはできないが，丁寧に査読していただいたことに謝意を表する次第である。本稿は亡父，小川清に捧げる。

[1] これは，当該方言が日本語共通語の表記法で書いても違和感がない音韻体系であることと，日本語方言学分野の先行研究がグロスを用いずにカタカナ書きで例文提示する場合が多いので，諸先行研究における表記法との連続性に鑑みてのことである。2 段目で基底形（形態素表示）を示し，それに対して 3 段目でグロスを付けている。4 段目が共通語訳である。

（1）飯塚市方言の『ヨル』（/yor/）と『トル』（/tyor/）が対立する例[2]

a.　ヒヨコバ　　タベヨル。
　　hiyoko=ba　　tabe-yor-ru
　　ひよこ =ACC　食べる -PROG-NPST
　　「ひよこ（菓子名）を食べているところだ。」

b.　ヒヨコバ　　タベチョル。
　　hiyoko=ba　　tabe-tyor-ru
　　ひよこ =ACC　食べる -PRF-NPST
　　「ひよこ（菓子名）を食べてしまっている。」

この継続相の『ヨル』と完了相（パーフェクト）の『トル』は，一般に動詞に後接するが，『ヨル』については複数の方言で形容詞に後接する場合の報告もなされている（岡野 1984，工藤（編）2001，久野 2001，村上 2004a，など）[3]。

『ヨル』と『トル』というのは日本語方言学でしばしば議論がなされるテーマであるにも関わらず，『トル』が動詞以外に後接する場合については注目度が低いようで，次節で示すように例自体は先行研究の中に散見されるにもかかわらず，その詳しい報告というのが見当たらない。本稿は飯塚市方言を対象言語として，動詞以外（具体的には形容詞およびコピュラ）に後接する『トル』について詳しい記述を行うと同時に，その『トル』がアスペクトではなくモダリティを表すことを論じるものである。

なお，（1a）において基底 /yor-ru/ で示している部分は「ヨル」と「ヨー」のいずれでも発音される。共時的には「ヨル」と「ヨー」は異形態であると考えられる。同様に，（1b）の基底 /tyor-ru/ で示している部分も「チョル」と「チョー」のいずれでも発音されるため，共時的には「チョル」と「チョー」が異形態であると考えられる。一般に /r/ が発音（表層）に反映されている「ヨル」および「チョル」が丁寧な発音であり，/r/ の弱化と母音融合を経たと考えられる「ヨー」および「チョー」がカジュアルな発音である。例文あるいはグロスについてはより古い形と考えられる「ヨル」/yor-ru/ および「チョル」/tyor-ru/ で統一して示しているが，日常会話における頻度でいうと「ヨー」や「チョー」で発音する場合のほうが多いと思われ

---

[2] 当該方言とその周辺の方言（いわゆる筑豊方言）では，『トル』が「チョー」や「チョル」という音形を持つ（青柳 1983，九州方言研究会 1991，占部 2001，塩川 2014）。話者の方言を聞いていると，福岡市方言などに見られる「トー」や「トル」をも許容する場合が一部あり，岡野（1984）の八木山方言でも「トル〈稀〉」が記されているが，本稿の例文においては『トル』に相当する接辞 /tyor/ が関係する部分のカタカナ音韻表記を無標な子音 /ty/（[tɕ]）を使った「チョ」（チョー，チョル，チョッ，チョラ）で統一している。撥音の後に来る場合は「ジョ」（子音は [dʑ]）になる。

[3] 本稿が調査した現在の飯塚市方言では『ヨル』が形容詞に後接することがない。また，岡野（1984）の八木山方言では『ヨル』に『トル』が接続した「ヨッチョル」という形式が報告されており，「ヨッタ」よりも強い確信を持って過去の習慣を断言するものとされている。この「ヨッチョル」という形式も本稿の話者は許容しない。

る。『トル』について「チョル」と「チョー」の 2 つが異形態によるものとして捉えられるのはアスペクトを表す『トル』だけでなく，本稿がモダリティを表すと主張する『トル』についても同じである。

2. 先行研究

動詞以外に『トル』が後接する例については, 久野（2001）に播州方言（兵庫県）の例，住田（1985）に若松方言（北九州市）の例，松田（1991）に筑後方言（福岡県）の例，そして，岡野（1984）に本稿で扱う方言と使用地域が近い飯塚市八木山方言の例が見られることは見られるのだが，いずれにおいても様々な例文の一部として垣間見える程度であって，そこに注目しての詳しい記述・分析はなされていない。なお, 久野（2001）では古い失われた方言とされている。以下の（2）から（5）は形容詞に『トル』が後接する例である。

（2）播州方言（兵庫県）の例

アンナトコ　イカント　ヨカットーワ（あんなところに行かなくてよかったよ）　久野（2001: 108），下線は筆者

（3）若松方言（福岡県北九州市）の例 [4]

「カッ」は，（中略）

マー　コラ　イタカットル　ヨ。（中女）

まあ，これは（この傷では）痛かったはずだよ。

などと，助詞「テ」が接続する。「イタカットル」の「トル」は，「て居る」である。　住田（1985: 184），傍線は省略，下線は筆者

（4）筑後方言（福岡県）の例

サムカットルガ　寒かったはずだよ

「オーバ無しでサムカットルガ」　松田（1991: 337），下線は筆者

（5）八木山方言（福岡県飯塚市）の例

形容詞に「チョル」を添えたものは，「イカンデ　ヨカッチョル　ヨ。」（その人は行かなくてほんとうによかったよ。）のように，他者の置かれた状況に対する判断の断言である。　岡野（1984: 70），傍線は省略，下線は筆者

さらに，岡野（1984）に同じく八木山方言でコピュラに『トル』が後接する例 [5] がある。『トル』が表す意味については（5）の場合と同様に判断の断言としている。

---

[4] 引用中の「（中女）」というのは，昭和 60 年 8 月に 37 歳の女性話者（住田 1985）。現在の年齢は 70 代半ばということになるので，本稿の話者 2 名と同世代である。

[5] この例文ではコピュラが「ヤ」（/yar/）でなく「ジャ」（/zyar/）で出ているようである。「ソン」は青柳（1983）に「そん 血筋」，徳川（監修）（1989）に「そん【孫】血統。血筋。」とある。また, 岡野（1984: 70）には「ジソンジャッチョル」（字の上手な家系だった）とあるが「ジソン」で意味を成すかは，本稿の話者も知らない語であったため不明。

（6）ジノ　ジョーズナ　ソンジャッチョル。（たしかに字の上手な家系だった）

岡野（1984: 66），傍線は省略，下線は筆者

共通語訳などの限られた情報から判断する限り，先行研究に見られる形容詞に後接する『トル』には意味的に共通点がある。すなわち，過去の命題に関しての対事的モダリティ（のうちの認識的モダリティ）[6]を表すように見える[7]。本稿では西日本方言の1つである飯塚市方言における形容詞およびコピュラに後接する『トル』について詳しく調査した結果を示しつつ，その『トル』がモダリティを表すことを主に共時論の観点から詳しく論じる。

3. 対象方言と話者

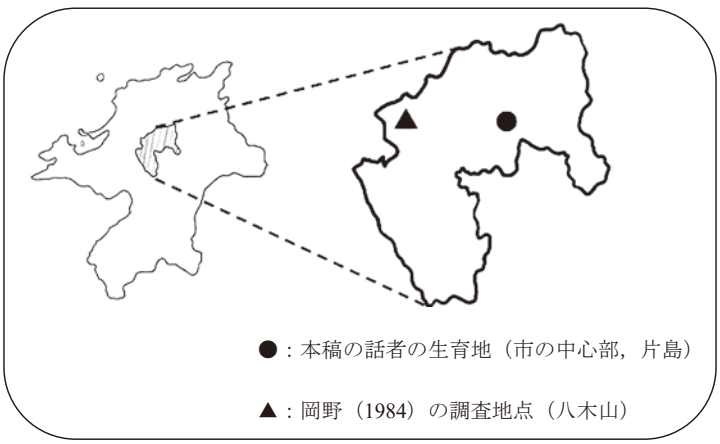

図1　福岡県飯塚市の位置と話者の生育地

本稿の飯塚市方言の調査は主に2020年から2022年にかけて複数回実施した。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響もあり，対面，電話，手紙での調査を併用した。話者は1947年生まれの男性と，1950年生まれの女性である。話者2人は兄妹であり，いずれも生まれてから高校を卒業するまで旧飯塚市（1932年設置）中心部で生活した。図1に示した現在の飯塚市（2006年に合併）では丸印のあた

[6] 本稿では庵（2001/2012）の「対事的モダリティ／対人的モダリティ」を用いているが，日本語のモダリティ表現を大きく2つに分ける考え方をしている研究・術語としては，寺村（1982）の「対事的ムード／対人的ムード」，仁田（1989, 1991）の「言表事態めあてのモダリティ／発話・伝達のモダリティ」，益岡（2000）の「対命題態度のモダリティ／表現・伝達態度のモダリティ」，仁田（2000）の「命題めあてのモダリティ／発話・伝達のモダリティ」などがある。モダリティを表現主体の主観的な態度を表すものとしている点は共通している。

[7] モダリティだとされていないものとしては，中村（2019）にいわゆるカ語尾（と共通の起源を持つ形態素）に接続する『トル』の例があり，「-tjor- が過去時制の標識として機能しているようにみえる。」（中村 2019: 175）との記述がある。

りで，遠賀川のすぐ西に位置している。岡野（1984）の調査地点である八木山は三角印のあたりで，飯塚市の中でも山間に位置しており，話者も本稿の話者より 40 歳ほど年上である。ちなみに，本稿の飯塚市方言についても，話者 2 名の親世代が形容詞およびコピュラに後接する『トル』を使用しているのを筆者は過去に聞いたことがある。また，男性話者が本稿の完成前に他界したため，査読者のコメントに対応するために 2024 年に行った追加調査で得られた例文（4.1 節の（11）と（12），6 節の（25））については，その文法性判断を女性話者だけによっている。

4. 飯塚市方言で動詞以外に後接する『トル』の意味と例文

『トル』が後接しうる語にはどのようなものがあるかを調査した結果，飯塚市方言において動詞以外で『トル』が後接しうるのは形容詞とコピュラであることがわかった。この 4 節では『トル』が形容詞およびコピュラに続く場合の例文を示しつつ, その場合の『トル』が「過去の事態に対する断定的判断」[8] という認識的モダリティ（略号：PST.JUDG）を表していることを意味的な面から論じる。静的動詞に後接する『トル』については 6 節で論じる。

4.1. 形容詞に『トル』が後接する場合の意味と例文

本稿が調査対象としている飯塚市方言が用いられる地域は，カリ活用に起源を持つとされる「カ語尾」の形容詞が使われる地域（松田 1969/1999）[9] である。そのカ語尾形容詞に『トル』が後接する以下の（7a, b）のような例があり, 『トル』相当の「チョル」は，（7c）の「イタカッタローネ」のように，過去を表す接辞 /tar/ と推量を表す接辞 /oo/ を組み合わせて用いる場合 [10] と類似の文脈で用いられる。この形容詞に

---

[8] この意味ラベルについては査読者から頂いた意見も参考にした。また，以下の例文からもわかるように, モダリティの『トル』は主節に加えて一部の従属節でも用いられる（5.3 節）が，理由節の『トル』は必ずしも話し手の発話時の判断を表すとは言えない場合もあるようである。従属節の『トル』の詳細については今後の課題としたい。

文脈：高校野球で，打者が空振りしてすっぽ抜けたバットが客席に飛んで行き，それに当たった客が怪我をしたという話を聞いて，客は痛かったに違いないと述べる。

バットワ　　キンゾクヤッ<u>チョル</u>キ,
batto=wa　　kinzoku=yar-tyoru=ki,
バット =TOP　金属 =COP-PST.JUDG=CSL,
イタカッ<u>チョ</u>ローネ。
ita-kar-tyor-oo=ne
痛い -ADJLZ-PST.JUDG-INFR=SFP
「バットは金属だったに違いないから，痛かったに違いないね。」

[9]「北は遠賀川の河口かち（ママ），南の志布志湾へ向けて九州を縦割りにすると，その西部一帯がカ語尾地区で，豊日がほとんど完全に除外されます。」（松田 1999: 24）

[10]「タロー」形式については松岡（2021a: 60）の柳川方言と同じように過去接辞を /ta/ とみなして「タヤロー」（/ta=yar-oo/）の縮約と解釈するやり方と，過去接辞を /ta/ でなく /tar/ として推量接辞 /oo/ がついたもの（/tar-oo/）と解釈するやり方があると思われる。本稿の飯塚市方言においては形態論的にどちらがより合理的かの判断ができるほどのデータを筆者が持っていないため，この点についての結論は出さず，本稿においてはグロスが簡潔になる過

『トル』が後接した形が使われる場合，一般に話者の確信度が高いという特徴がある（コピュラに『トル』が後接した場合も同様）ため，共通語訳では便宜的に「～に違いない」をあてている。

(7) 文脈：話者はAさんが足を机の角にぶつけたのを目撃した。話者はともにそれを目撃したBさんに対して，Aさんが痛みを感じたかどうかに関する自分の考えを述べる。

a. イタカッチョルヨネ。
ita-kar-tyoru=yo=ne
痛い -ADJLZ-PST.JUDG=SFP=SFP
「痛かったに違いないよね。」

b. イタカッチョルバイ。
ita-kar-tyoru=bai
痛い -ADJLZ-PST.JUDG=SFP
「痛かったに違いないよ。」

c. イタカッタローネ。
ita-kar-tar-oo=ne
痛い -ADJLZ-PST-INFR=SFP
「痛かっただろうね。」

これらの例文およびグロスについて補足しておくべき点が2点ある。1点目は /tyoru/ という形態素についてである。これはもともと，アスペクト接辞の /tyor/ に非過去の接辞である /ru/ が続いた形 /tyor-ru/ だったのであろうが，現在の飯塚市方言においてモダリティを表す /tyor/ が用いられた文にはテンスの対立が無い。/tyor-ru/ の /ru/ の位置に過去接辞の /tar/ を付けての /tyor-tar/「チョッタ」という形は許されない[11]。そのため，通時的な観点から，動詞に後接してアスペクトを表す /tyor/ の後の /ru/ は非過去を表していたが，形容詞とコピュラに後接してモダリティを表す /tyor/ の後の /ru/ はその形だけが残っているものであって，実質的に非過去の意味は失われていると考えている。本稿ではモダリティを表す「チョル」を /tyor-ru/ のように細かく分析せず，/tyoru/ として，そのグロスは過去テンスをも含

去接辞を /tar/ とするやり方を採用することにする。同じく，「チョロー」/tyor-oo/ も「チョルヤロー」/tyor-u=yar-oo/ の縮約形とは解釈しない簡潔なやり方で統一する。もちろん，このやり方の違いが本稿の主要な議論に影響しないことは断っておく。

[11]『トル』がアスペクトを表す場合は以下の例のように「チョッタ」という形が許され，「チョル」とテンスの対立がある。
文脈：時間を間違い，映画館に着いたときには見たい映画が終わっていたことを述べる。

エーガワ　オワッチョッタ。
eega=wa　owar-tyor-tar
映画 =TOP　終わる -PRF-PST
「映画は終わってしまっていた。」

んだ「PST.JUDG」としている。

2 点目はカ語尾の分析についてである。本稿においては形容詞のカ語尾に相当する部分については形容詞化接辞（略号：ADJLZ）であるとする松岡（2021b）の論を採用している。カ語尾相当部分 /kar/ について，動詞化接辞とする研究もある（黒木 2015，松丸 2019，中村 2019，門屋 2020）が，カ語尾形容詞（語幹）と動詞（語幹）の振る舞いが違うなどの根拠から松岡（2021b）は形容詞化接辞であることを論じている。

この「過去の事態に対する断定的判断」を表すと考えられる『トル』は筆者が調査した限りでは全てのカ語尾形容詞に後接できる。また，以下の（8）のように，出来事を目撃している必要もない。

（8）文脈：今は 100 歳近くになって体の弱った自分の母親が，戦時中（80 年前）には，活発に働いていたという内容の話を聞いて，その内容が間違ってないだろうと話者が考えた旨を理由とともに述べる。

オフクロモ　ワカカッチョルキ
ohukuro=mo　waka-kar-tyoru=ki
母 =ADD　若い -ADJLZ-PST.JUDG=CSL
ウゴキキッタローネ。
ugok-i-kir-tar-oo=ne
動く -THM-POT-PST-INFR=SFP
「母も若かったに違いないから，動けただろうね。」

さらに，（9）は反実仮想を表す場合であるし，（10）からは独り言の場合にも使えることと終助詞なしで「チョル」で言い切ることができることもわかる。ちなみに，（10）の例のような文末位置で「チョル」の「ル」や異形態「チョー」の長母音が明確に発音されない場合があるが，文末位置に限定された現象なのであくまでも音声的な現象であると考えられる。

（9）文脈：以前の大雨のときにダムの決壊を防ぐため行われた緊急放流の話をしている。緊急放流をしていなかったら，ダムが決壊していたに違いないという自分の考えを述べる。

アン　トキ　ホーリュー　センヤッタラ
an　toki　hooryuu　se-n=yar-tara
あの　時　放流　する -NEG=COP-COND
ダムガ　アブナカッチョルバイ[12]。
damu=ga　abuna-kar-tyoru=bai
ダム =NOM　危ない -ADJLZ-PST.JUDG=SFP

[12] 終助詞の /bai/ に対して /tai/ は来にくいようだが，紙幅の関係でこの注で指摘するに留める。

「あのとき放流しなかったら，ダムが危なかったに違いないよ。」

（10）文脈：自分の店の料理を批判していたお客が食べに来た。陰からこっそり観察していると，とても美味しそうに食べて帰った。お客が帰ったところで，お客が料理を美味しいと思ったに違いないことを確信して話者が一人呟く。

ウマカッチョ（ル）。

uma-kar-tyoru

美味しい -ADJLZ-PST.JUDG

「美味しかったに違いない。」

以上のように，形容詞に後接する『トル』は推論が働く事象であれば全般的に使用が可能な生産性の高い形式である。逆に，以下の例のように推論を必要としない場合には，形容詞に後接する『トル』を使うことはできない。（11）は事態を直接目撃している場合，（12）と（13）は 1 人称主語で話し手自身の感覚を話す場合である。例文に付した「#」は，文法的には成立するが当該文脈における使用が不自然であることを表す。

（11）文脈：様々な色のボールが入った箱がある。話者は A さんが箱から赤いボールを取り出して持って行ったのを目撃した。その場を立ち去った後で，（話者が A さんを目撃したことは知らない）B さんから，A さんがボールを取り出したがそのボールは何色だったと思うか，と聞かれて答える。（cf.（8））

アカカッチョルバイ。

aka-kar-tyoru=bai

赤い -ADJLZ-PST.JUDG=SFP

「赤かったに違いないよ。」

（12）文脈：話者が以前に足を机の角にぶつけて本当に痛かったという体験を述べる。（cf.（7））

ホント　イタカッチョルバイ。

honto　ita-kar-tyoru=bai

本当に　痛い -ADJLZ-PST.JUDG=SFP

「本当に痛かったに違いないよ。」

（13）文脈：昼に話者が 1 人で行ったレストランの料理が美味しかったかどうかを聞かれて，美味しかったという感想を答える。（cf.（10））

ウマカッチョ（ル）。

uma-kar-tyoru

美味しい -ADJLZ-PST.JUDG

「美味しかったに違いない。」

これらの例から，形容詞に後接する『トル』が意味的には**「過去の事態に対する断定的判断」という認識的モダリティ**を表していると考えられる。以下，これを本稿では「断定的判断」と呼ぶ。共通語訳だと推量の「～だろう」を用いて訳したくなるような例文もあるが，この『トル』の意味を「推量」としていない理由は後述（特に 5 節）する。他に，上で挙げた例からわかることとして，アスペクト（完了）の『トル』と違って，現在にまで何か影響が及ぶような過去の事象に対してでなくても使うことができる。そして，形態統語的な振る舞いにもモダリティを表す形式一般との共通点があるのだが，この点についても 5 節で詳しく論じる。

4.2. コピュラに『トル』が後接する場合の意味と例文

飯塚市方言においては『トル』がコピュラの「ヤ」/yar/ にも後接する。そして，形容詞に後接する場合と同様に「断定的判断」を表すと考えられる。以下に例文を 3 つ示す。それぞれ，（14a, b）は名詞に，（14c）は（共通語の）形容動詞相当の状態性の高い名詞に，（14d）は動詞の否定形にコピュラが続いた場合である。

（14）　a.　文脈：朝起きると，家の庭が荒らされており，犬のものと思われる足跡が残っているのを話者は同居の家族とともに見つけた。話者が同居の家族に対して「庭を荒らしたのは犬だったに違いない。」という自分の考えを述べる。

イヌヤッ<u>チョル</u>ネ。

inu=yar-tyoru=ne

犬 =COP-PST.JUDG=SFP

「犬だったに違いないね。」

b.　文脈：中身の見えない箱に赤と黒のボールが 1 個ずつ入っている。話者は A さんが赤いボールを取り出して持って行ったのを見た。その場を立ち去った後で，B さんから，A さんの後に C さんもボールを取り出したが，そのボールは何色だったと思うかと聞かれて，黒だったに違いないと自信を持って答える。

クロヤッ<u>チョル</u>バイ。

kuro=yar-tyoru=bai

黒 =COP-PST.JUDG=SFP

「黒だったに違いないよ。」

c.　文脈：話者と A さんの共通の友人である B さんが急逝したために，2 人で葬式に来ている。B さんには長らく会っていなかったが，亡くなる前日もマラソン大会に出ていたと知り，A さんが話者に「B さんは亡くなる直前まで元気だったんだね。」と水を向ける。それに対して話者が「元気だったに違いない。」と述べる。

ゲンキヤッ<u>チョル</u>ヨ。

genki=yar-tyoru=yo
元気 =COP-PST.JUDG=SFP
「元気だったに違いないよ。」

d. 文脈：昨日はAさんが町内会の集まりに顔を出した。珍しいことなので，Aさんが嫌っているBさんが集まりを欠席することが周知されていたことに理由があると感じたCさんが，話者に対して「Bさんが欠席じゃなかったら，Aさんは来ただろうか？」と話者に質問した。話者がそれに答えて「来なかったに違いない。」と述べる。（反実仮想）

コンヤッチョルバイ。
k-o-n=yar-tyoru=bai
来る -THM-NEG=COP-PST.JUDG=SFP
「来なかったに違いないよ。」

5. モダリティを表す『トル』の形態統語的な振る舞い

前の4節では，形容詞およびコピュラに後接する『トル』が意味的にモダリティを表すことを論じたが，この5節においては，形容詞およびコピュラに後接してモダリティを表す『トル』の形態統語的な振る舞いについて論じる。比較対象として，動詞に後接してアスペクトを表す『トル』だけでなく，飯塚市方言（および周辺方言）において頻繁に用いられるモダリティ（推量）接辞の /oo/ も加え，3者を比較する形で議論を進める。本節の主眼はこれら3者のうち，アスペクトを表す『トル』はもちろんのこと，推量接辞 /oo/ と比べてもモダリティの『トル』の使用制限が強いという言語事実を明らかにすることにある。

5.1. 否定文における『トル』

まず，モダリティを表す『トル』には否定の要素を後接させることができない[13]。否定の要素（例文では二重下線部）について，(15a) でアスペクトの『トル』には否定の /n/ が後接するが，モダリティを表す『トル』については (15b) と (15c) に示すように否定の /n/ を後接させることができず，否定要素と共に用いる場合は (15d) と (15e) に示すように /na-kar/ をその前に置かなければならない。これは (15f) と (15g) で推量接辞 /oo/ と否定要素を同時に用いる場合と平行的である。例文に付した「＊」は文法的に不適格の意。

[13] 仁田（1989，1991）の「真正モダリティ」にも通じるところがある。「真の典型的なモダリティは，言表事態や発話・伝達の在り方をめぐっての発話時における話し手の心的態度の言語的表現である。こういった「発話時における」「話し手の」といった要件を充たした心的態度の表現を〈真正モダリティ〉と本稿では仮に呼び，（中略）形式自体が，過去になることもなければ，否定にもならず，話し手の心的態度のみを表す表現形成を〈真正モダリティ形式〉と仮称し，（後略）」（仁田 1989: 34–35）

（15）否定要素との位置関係

a.　タベチョラン。
tabe-tyor-a-n-φ
食べる -PRF-THM-NEG-NPST
「食べてしまっていない。」

b.　* ウマカッチョラン。
uma-kar-tyor-a-n-φ
美味しい -ADJLZ-PST.JUDG-THM-NEG-NPST
「美味しかったに違いないことはない。」

c.　* イヌヤッチョラン。
inu=yar-tyor-a-n-φ
犬 =COP-PST.JUDG-THM-NEG-NPST
「犬だったに違いないことはない。」

d.　ウモ　　ナカッチョルヨ。
uma-ku　　na-kar-tyoru=yo
美味しい -ADJLZ　無い -ADJLZ-PST.JUDG=SFP
「美味しくなかったに違いないよ。」

e.　イヌヤ　　ナカッチョルヨ。
inu=yar　　na-kar-tyoru=yo
犬 =COP　無い -ADJLZ-PST.JUDG=SFP
「犬でなかったに違いないよ。」

f.　ウモ　　ナカッタローネ。
uma-ku　　na-kar-tar-oo=ne
美味しい -ADJLZ　無い -ADJLZ-PST-INFR=SFP
「美味しくなかっただろうね。」

g.　イヌヤ　　ナカッタローネ。
inu=yar　　na-kar-tar-oo=ne
犬 =COP　無い -ADJLZ-PST-INFR=SFP
「犬でなかっただろうね。」

これらは，ともにモダリティを表す接辞の /oo/ と『トル』が共通した振る舞いをして，アスペクトの『トル』とは振る舞いが違うという例である。

5.2. 疑問文における『トル』

次に，疑問文について述べる。（16a）がアスペクトの『トル』にいわゆる準体助詞の /to/ が上昇イントネーション（疑問）を伴って後接する場合で他者に対する典型的な〈質問〉を表し，（16b）が推量の /oo/ に疑問の /ka/ が後接する場合で〈自問〉あるいは〈自問しながらの質問〉を表す。例文の「↗」は文末における上昇イント

ネーションを表す。これらは飯塚市方言でよく見られる疑問文の作り方だが，(16c) や（16d）のようにモダリティの『トル』を用いた場合は，いずれのやり方でも疑問文が作れずに非文となることがわかる。ただし，（世代差はあるかもしれないが）少なくとも本稿の 2 名の話者については，接語 /ka/ で終わる疑問文については，/ka/ の直前が非過去接辞の /ru/ および非過去接辞に由来する /ru/ を含む /tyoru/ の場合は許されず，/ka/ の直前が推量の /oo/ の場合にだけ許されるという形態統語的な面からの分析ができるので，ここで意味的に特に注目すべきは（16c）と（16d）において「ト↗」で終わる疑問文が作れないという点である。（16c）と（16d）の類例として，文末位置で接語の /to/ や /ka/ を用いず，『トル』で終止して上昇イントネーションで疑問を表すような「* ウマカッチョル↗ 。」と「* イヌヤッチョル↗ 。」も非文である。

(16)〈質問〉および〈自問〉で使えないモダリティの『トル』

a.　タベチョルト↗ 。
tabe-tyor-ru=to
食べる -PRF-NPST=FMN
「食べてしまったか？」

b. タベタローカ。
tabe-tar-oo=ka
食べる -PST-INFR=Q
「食べただろうか？」

c.　* ウマカッチョル{ ト↗ / カ }。
uma-kar-tyoru{=to/ =ka}
美味しい -ADJLZ-PST.JUDG{=FMN/ =Q}
「美味しかったに違いないか？」

d. * イヌヤッチョル{ ト↗ / カ }。
inu=yar-tyoru{=to/ =ka}
犬 =COP-PST.JUDG{=FMN/ =Q}
「犬だったに違いないか？」

さらに，（7）と類似の文脈を持つ以下の例文（17）において，（17a）のように推量接辞 /oo/ を使った場合は当人に尋ねることができるのに対して，（17b）のモダリティの『トル』を使った文では当人に尋ねることができない。

(17)〈確認要求〉で使えないモダリティの『トル』（目撃した内容は（7）と同じ）

a.　イタカッタロー↗ 。
ita-kar-tar-oo
痛い -ADJLZ-PST-INFR
「痛かっただろう？」

b.　* イタカッチョル↗ 。
ita-kar-tyoru
痛い -ADJLZ-PST.JUDG
「痛かったに違いない？」

これら (16) と (17) からわかるのは，モダリティ接辞の /oo/ とアスペクトを表す『トル』は疑問文で使えるが，モダリティの『トル』については許されないということである。

5.3. 構成できる従属節の種類

そして，本節では飯塚市方言における理由節，条件節，連体修飾節を取り上げての 3 者比較を行う。主節に比べて従属節においてはモダリティ形式の使用に制限がかかることが共通語の研究では知られている（奥津 1974，寺村 1977/1992，など）ところである。

理由節においては，ここで比較する 3 者のいずれをも使用することができる。（18a）がアスペクトの『トル』，（18b）がモダリティ接辞の /oo/，（18c）と（18d）がモダリティの『トル』を使った例である（（8）と注 8 にも例文あり）。

（18）理由節

a.　マゴガ　　ホシガッチョルキ，
mago=ga　　hosigar-tyor-ru=ki
孫 =NOM　　欲しがる -PRF-NPST=CSL
ハヨ　モッテキナイ。
hayo　mottek-i-nai
早く　持って来る -THM-HON.IMP
「孫が欲しがっているから，早く持ってきて頂戴。」

b.　アメヤローキ，　　スカン。
ame=yar-oo=ki　　suk-a-n-ϕ
雨 =COP-INFR=CSL　　好く -THM-NEG-NPST
「雨だろうから嫌だ。（lit. 雨だろうから好かない。）」

c.　オーカッチョルキ，　　ヘラシタバイ。
oo-kar-tyoru=ki　　heras-i-tar=bai
多い -ADJLZ-PST.JUDG=CSL　　減らす -THM-PST=SFP
「多かったに違いないから減らしたよ。」

d.　文脈：新聞部の部室から古い記事原稿が見つかった。見え消しされた箇所について，話者を含め当時の部員は誰の手によるものか全く記憶がないが，当時，記事を書く担当が話者であったことから，自分が行ったに違いないと話者は考えた。
カイタトワ　　オレヤッチョルキ，
kak-i-tar=to=wa　　ore-ϕ=yar-tyoru=ki
書く -THM-PST=FMN=TOP　　1-SG=COP-PST.JUDG=CSL
ケシタトモ　　オレヤローネ。
kes-i-tar=to=mo　　ore-ϕ=yar-oo=ne
消す -THM-PST=FMN=ADD　　1-SG=COP-INFR=SFP
「書いたのは俺だったに違いないから，消したのも俺だろうね。」

条件節[14]においてはアスペクトの『トル』は使用可能（19a）だが，モダリティを表す /oo/ とモダリティの『トル』は使用することができない（19b, c, d）。

（19）条件節

a.　アン　ヒトガ　　キチョルナラ
an　hito=ga　k-i-tyor-ru=nara
あの　人 =NOM　来る -THM-PRF-NPST=COND
イカンバイ。
ik-a-n-φ=bai
行く -THM-NEG-NPST=SFP
「あの人が来ているなら，（私は）行かないよ。」

b.　*アン　ヒトガ　イコーナラ
an　hito=ga　ik-ru-oo=nara
あの　人 =NOM　行く -NPST-INFR=COND
イカンバイ。
ik-a-n-φ=bai
行く -THM-NEG-NPST=SFP
「あの人が行くであろうなら，（私は）行かないよ。」

c.　*ウマカッチョルナラ　マタ　ツクルバイ。
uma-kar-tyoru=nara　mata　tukur-ru=bai
美味しい -ADJLZ-PST.JUDG=COND　また　作る -NPST=SFP
「美味しかったに違いないなら，また作るよ。」

d.　*イヌヤッチョルナラ　アンシンバイ。
inu=yar-tyoru=nara　ansin=bai
犬 =COP-PST.JUDG=COND　安心 =SFP
「犬だったに違いないなら，安心だよ。」

ここまでに示した理由節および条件節においては，モダリティ（推量）の /oo/ とモダリティの『トル』が同じような振る舞いだが，以下の連体修飾節では許容度に差が出る。（20a）のアスペクトの『トル』と（20b）のモダリティ（推量）の /oo/ は問題なく連体修飾節を作れるが，（20c, d）のモダリティの『トル』においては話者が違和感を表明する。例文では違和感を文頭の「？」で示している。具体的には，「誰かが言っているのを聞いたらそのように解釈すると思うが，自分から使うことはない。」という程度の許容度である。少なくとも，モダリティ（推量）の /oo/ よりは連体修飾節を作りにくいのは間違いない。

[14] ここでの例は認識的条件文（有田 2007）の前件である条件節（「ナラ」を使用）だが，「タラ」や「バ」を用いた条件節でも同様で，アスペクトの『トル』は使えてモダリティの『トル』は使えない。

（20）連体修飾節

a.　モー　オキチョル　モンノ　オルバイ。
moo　oki-tyor-ru　mon=no　or-ru=bai
もう　起きる -PRF-NPST　者 =NOM　居る -NPST=SFP
「もう起きている者が居るよ。」

b.　キノーモ　キチョッタロー　モンガ　オル。
kinoo=mo　k-i-tyor-tar-oo　mon=ga　or-ru
昨日 =ADD　来る -THM-PRF-PST-INFR　者 =NOM　居る -NPST
「昨日も来ていたであろう者が居る。」

c.　?アカカッチョル　イタノ　アルバイ。
aka-kar-tyoru　ita=no　ar-ru=bai
赤い -ADJLZ-PST.JUDG　板 =NOM　ある -NPST=SFP
「（以前は）赤かったに違いない板があるよ。」

d.　?イドヤッチョル　アナガ　アルバイ。
ido=yar-tyoru　ana=ga　ar-ru=bai
井戸 =COP-PST.JUDG　穴 =NOM　ある -NPST=SFP
「（以前は）井戸だったに違いない穴があるよ。」

5.4. 3 者比較のまとめ

5 節のここまでに論じた内容をまとめると以下の表 1 のようになる。モダリティの『トル』は形態統語的な制限が強い。否定の形や疑問の形をとらず，明らかにアスペクトの『トル』より制限が強い。モダリティ接辞の /oo/ と比べても構成できる従属節の種類が少なく，テンスの対立もないため，“トル判断文”とでも呼べそうな，文のタイプすら決めているようにも見える。ゆえに，6 節で述べるような意味的な連続性は認められるものの，共時的にはアスペクトの『トル』とモダリティの『トル』は別形態素と考えて良い。

表 1　3 者の形態統語的な振る舞い

	否定文	疑問文	理由節	条件節	連体修飾節
アスペクトの『トル』	○	○	○	○	○
モダリティの /oo/	×	○	○	×	○
モダリティの『トル』	×	×	○	×	? ～ ×

○：可　×：不可　?：違和感あり

5.5.「チョロー」形式について

最後に，モダリティの『トル』（断定的判断）とモダリティの /oo/（推量）についての補足として，飯塚市方言に存在する「チョロー」形式を取り上げておきたい。

飯塚市方言には「チョロー」という形式が存在する。以下の（21）で示すように，モダリティの『トル』の後にさらにモダリティ（推量）接辞 /oo/ が続いた形式で

あると思われる（注 8 の例文も「チョロー」が用いられたものであるので参照されたい）。

（21）「チョロー」の例文

a.　ウマカッチョローー。
uma-kar-tyor-oo
美味しい -ADJLZ-PST.JUDG-INFR
「美味しかったに違いないだろう。」

b.　イヌヤッチョローー。
inu=yar-tyor-oo
犬 =COP-PST.JUDG-INFR
「犬だったに違いないだろう。」

本稿のいずれの話者も文法的であるとする形式である。なお，類例が岡野（編）（1989: 72）の言語地図に見られる。筑後川沿いの旧筑前国およびその近接地域において，共通語の「高かったに違いない」を方言で「タカカッチョローー」と表現することが読み取れる。九州方言（あるいは肥筑方言）以外では，以下の（22）の例が香川県観音寺市方言を記録した資料の中にある。

（22）観音寺市方言（香川県）の例
過去の推量に「～トロ」という言い方がある。
ナガイキシトッテ　ヨカットロ（長生きしていてよかっただろう）
国立国語研究所（編）（2003: 19），下線は原文の通り

このような形式の存在はモダリティの『トル』がモダリティの /oo/ とは異なる意味を担っていることを示唆するものであると考える。モダリティの『トル』と /oo/ のいずれもが同じ「推量」を表すのであれば「チョロー」形式というのは推量が連なった形式ということになるからである。そう主張する論もあるかもしれないが，「チョロー」は推量が連なったものと解釈できるような意味を表しているようには見えず，論としては弱いと思われる。では，具体的にここでの「チョル」と「チョロー」はどういった対立かといえば，話者の発話態度を示すもので，「チョル」が「（判断の）断言」なのに対して，/oo/ が加わった「チョロー」（や「トロ」）はそれに対立する「（判断の）非断言」を表していると言えそうである。モダリティの『トル』にアスペクトの『トル』の場合と同様の「チョル」/「チョロー」の対立がある（残っている）と言える。この対立は話者の確信度の違いとしても表れる。「タロー」（過去＋推量）形式，「チョロー」（断定的判断＋推量）形式，「チョル」（断定的判断）形式を比べると，確信度が低いほうから「タロー」＜「チョロー」＜「チョル」の順となる[15]。この「チョロー」形式についての議論からも，本稿ではモダリティ『ト

[15] 本稿の男性話者が「チョロー」は“確信のある推量”であるというコメントをしており，

ル』の意味を「推量」とはせずに「断定的判断」とする。

この「チョロー」形式を用いた疑問文（23）が使えるかどうかを話者に確認すると，（17a）と（17b）の間くらいの反応が返ってくる。「イタカッチョロー↗」で尋ねることもできはするが（17a）の「タロー」形式の方がより使いやすいとのことである。『トル』がアスペクトを表す場合の「チョロー」という形式自体は疑問文でも頻繁に使われるので，『トル』が断定的判断を表す場合の「チョロー」もある程度許容されるのだろう。

（23）「チョロー」を用いた疑問文〈確認要求〉（cf.（17））
イタカッチョロー↗。
ita-kar-tyor-oo
痛い -ADJLZ-PST.JUDG-INFR
「痛かったに違いないだろう？」

6. アスペクトの『トル』とモダリティの『トル』の意味的な連続性

ここまでのところ，モダリティの『トル』の存在とその意味を明らかにすることに力点をおいて論を展開してきた。その過程で，議論をシンプルにしようという意図があってのことだが，『トル』が「動詞に後接するならアスペクト，形容詞とコピュラに後接するならモダリティ」というような，後接先の品詞の概念を用いた区分と説明をしてきた。しかし，厳密には品詞できっぱりと線が引けるものではないということは本節で補足しておかねばならない。特に以下の（24）で示すような静的動詞（本稿ではとりわけ「アル（有る）」が重要）に『トル』が後接する場合が注目に値する。

（24）動詞「アル（有る）」および「イル（要る）」に『トル』が後接した場合
a.　文脈：畳の一部分だけが日焼けしていないのを見て，そこに置いてあったであろうものに言及する。
タンスガ　アッチョルヨ。
tansu=ga　ar-tyor-ru=yo
箪笥 =NOM　ある -PRF-NPST=SFP
「箪笥があったようだよ。（lit. 箪笥があっているよ。）」
b.　文脈：近所に大きな家が完成したのを見て，推定される費用の大きさに言及する。

女性話者が“「チョル」と「チョロー」はあまり変わらない気がする”というコメントをしている。前者については「タロー」よりも「チョロー」のほうが確信度が高いことに言及したものであって，後者についてはいずれもが推論を含む「チョル」と「チョロー」の認識的モダリティの対立が必ずしも話者にとって自覚的でないことの反映であると解釈している。

タクサン　オカネガ　イッチョルヨ。
takusan　okane=ga　ir-tyor-ru=yo
たくさん　お金 =NOM　要る -PRF-NPST=SFP
「たくさんお金が必要だったようだよ。（lit. たくさんお金が要っているよ。）」

『トル』をアスペクトの側から捉えた工藤（2004）によれば「西日本諸方言のシトル形式は，〈主体結果〉〈客体結果〉〈痕跡〉〈効力〉のすべてを表す」（工藤 2004: 28）とされている。術語について，工藤（2004：28, 45–46）で述べられている内容に筆者が飯塚市方言の例文を当てつつ説明すると，先行時の変化の〈（必然的）結果〉である〈主体結果〉（例文：タローガ　キチョル。（太郎が来て，今ここにいる。））に比べて，動作主体が客体にもたらした変化結果を表す〈客体結果〉（例文：コドモガ　オモチャ　コワシチョル。（子供が玩具を壊してしまっている。））においては，主語＝動作主体はその場に存在しなくてもよく，動作主体の特定化には発話主体の推論が働くとされる。〈主体結果〉と〈客体結果〉には「推論の有無」という違いがある。これらの必然的な〈結果〉に対して，「以前に成立した事象の偶然的な結果」（工藤 2004: 28）が〈痕跡〉であって，「話し手は〈知覚〉した，先行時の動作の間接的結果である〈痕跡〉という〈客観的証拠〉に基づいて，〈先行時の動作の推論（判断）〉を行う」（工藤 2004: 46）。「〈結果〉の場合よりも〈痕跡〉の場合のほうが，〈以前〉というテンス的側面が強まり，同時に，偶然的結果の知覚に基づく〈話し手の推論〉というムード的側面も出てくる」（工藤 2004: 28）とも述べられている。上で示した（24）はモダリティ的な，あるいは証拠性にもとづく判断とも呼べるような意味を表す〈痕跡〉の例と言えるものである。

さらに，（24）のような〈痕跡〉の例に加えて，動詞「アル」に後接する『トル』であっても，〈痕跡〉よりは「断定的判断」とするのが適当だと思われる例，すなわち〈客観的証拠〉に基づかずに推論している例があった。

（25）文脈：昔は二宮金次郎の像がどこの小学校にもあったものだという話をしていて，話者が行ったことのない小学校にも像があっただろうかと問われて，答える。
アン　ショーガッコーニモ　ゾーガ　アッチョルヨ。
an　syoogakkoo=ni=mo　zoo=ga　ar-tyoru=yo
あの　小学校 =DAT=ADD　像 =NOM　ある -PST.JUDG=SFP
「あの小学校にも像があったに違いないよ。」

以上から，本稿の主張する「断定的判断」は〈痕跡〉から派生したものだと考える。図示すると以下の表 2 のような『トル』の表す意味についてのグラデーションが描けることになる。点線矢印は「断定的判断」の意味が〈痕跡〉の意味を介して出たことを表す。

表 2　『トル』の表す意味

		例文	『トル』の表す意味
『トル』に前接する形式	形容詞・コピュラ	ウマカッチョルヨ。 （美味しかったに違いないよ。） イヌヤッチョルヨ。 （犬だったに違いないよ。）	モダリティ 断定的判断
	動詞	ゾーガ　アッチョルヨ。 （（〈客観的証拠〉はないが，）像があったに違いないよ。） タンスガ　アッチョルヨ。　オヤガ　シンジョルト。ヤケン… （箪笥があったみたいだよ。）（親が死んでいるの。だから…）[16]	〈痕跡〉　〈効力〉
		コドモガ　オモチャバ　コワシチョルヨ。 （こどもがおもちゃを壊してしまっているよ。） タローガ　キチョルヨ。 （太郎が来ているよ。）	〈客体結果〉 〈主体結果〉 アスペクト

〈痕跡〉というのは話し手が「〈知覚〉した，先行時の動作の間接的結果である〈痕跡〉という〈客観的証拠〉に基づいて，〈先行時の動作の推論（判断）〉を行う。」（工藤 2004: 46）ものであるのに対して，本稿が議論してきた「断定的判断」ではそのような〈客観的証拠〉は必ずしも必要ない。もちろん，〈痕跡〉と同じく〈客観的証拠〉がある文脈でも使えるが，話者なりの（主観的であってかまわない）根拠に基づいて推論（判断）を行うことが重要である。つまり，『トル』の〈痕跡〉から「断定的判断」への意味的発展（意味拡張）は，推論の基になる材料の範囲の拡大を伴っており，それが〈痕跡〉と「断定的判断」の違いである[17]。

本稿の主要な議論はここまでであるが，最後に 7 節と 8 節で本稿の議論から導かれる仮説と今後の見通しについて触れておきたい。

---

[16] ここでの〈効力〉の例（シンジョル）は，一見すると〈結果〉（ここでは〈主体結果〉）の例なのだが，〈効力〉では「先行時の動作・変化の達成と，後続時におけるなんらかの効力の現存を話し手は〈主体的〉に関係づける」（工藤 2004: 46）ことが重要とされ，表中の限られたスペースでは端的に例示することが難しい。以下は，工藤（2004: 46–47）が〈痕跡〉から〈効力〉への変化について説明している部分の抜粋である。例文は宇和島方言（愛媛県）のものである。

> 〈知覚できる客観的痕跡の現存〉がなくなり，従って，人称制限からも解放されると〈効力〉というパーフェクト的意味になる。先行時の動作・変化の達成と，後続時におけるなんらかの効力の現存を話し手は〈主体的〉に関係づける。
>
> 　あの子のお父さんは去年死んどる。そんで進学できん。
>
> 　その本なら中学の時，読んどる。教えてあげる。
>
> 過去の特定時を示す時間副詞（「去年」や「中学の時」）との共起が可能になって，先行時（過去）への重点化が進むが，まだ過去とは言い切れない。これはシタという〈完成相・過去〉が表すのである。

[17]「断定的判断」は〈痕跡〉の現存が無くても良いことと，さらに過去テンス的な面において，注 16 に引用した〈効力〉との類似点も持っていると言える。

7. 通時的変化についての仮説

モダリティを表す『トル』がどのように発生するのかという通時的な分析については，複数方言のデータを比較して進める必要があると考えており，現時点で確たることは言えないが，見通し（仮説）については述べておきたい。モダリティを表す『トル』がアスペクトの『トル』から発達したと考えると，肝になるのはカ語尾形容詞とコピュラの「ヤ」がいずれも存在動詞「アル」（有る・在る）を含む形式から発達したとされる点である。カ語尾形容詞は「クアリ」や「クアル」という形から発達した（吉町 1931: 58）とされ，コピュラの「ヤ」は「デアル」から発達した（松尾 1931: 112）とされている。逆に言えば，現在の飯塚市方言で『トル』が後接する動詞・カ語尾形容詞・コピュラはいずれも動詞あるいは動詞由来であるから，『トル』（あるいはその前身とされる「テオル」（て居る））が動詞のみに後接する時期があったということが推定されるわけである。

この仮説が正しいならば，形容詞とコピュラに後接してモダリティを表す『トル』が存在する方言は，動詞「アル」にも『トル』が後接するという特徴を満たしていることが予測される。動詞「アル」に『トル』が後接する方言としない方言があることは井上（2001: 59）からも窺われ，現在の飯塚市方言では上述した（24a）の例のように「アル」に『トル』が後接できる。この予測が飯塚市方言以外にも当てはまるかは今後検証が必要である。

8. 形容詞述語文に見られる動詞のアスペクト形式と同じ形式について [18]

本稿が主な分析対象としている『トル』から少し視野を広げて，「動詞（述語）のアスペクト形式と同形式が形容詞に（あるいは方言によっては名詞にも）付いて用いられる場合」について考えると，工藤（2007a）に以下の日本語諸方言に関する記述がある。

（26）　青森県五所川原方言，五戸方言，深浦方言，宮城県中田方言，熊本県松橋方言には，〈一時的状態〉であることを明示する形式があり，「人の存在」を表す本動詞「イダ」や「オル」の文法化によって成立している。

・今日　寒グデラ。／太郎　元気デラ。

・今日　寒カリヨル。／コノ前ワ　寒カリヨッタ。

（工藤 2007a: 27），下線は原文の通り

ここでの例のように，形容詞述語に動詞のアスペクト形式と同じ形式が観察される場合は，一時的であることを明示することが通言語的に観察されるとの指摘（八亀 2021: 65–66）もされている。

形容詞述語文の見方として言われているのは，「形容詞述語文を見るときに，必要となる重要な 2 つの軸は，「時間的限定性」と「評価性」の 2 つである。」（八亀

[18] この節は査読者から頂いたコメントのおかげで書き加えることができた。

2007: 65）や「形容詞述語文は，（A）〈広義ものの特徴づけ〉あるいは〈一時的状態の描写〉と（B）〈話し手の評価〉という，客体的な側面と主体的な側面の統合体としてある。」（工藤 2007b: 137）のような“2 つの軸”である。本稿では前者の「時間的限定性」と「評価性」という術語を用いることにするが，そうした場合に（26）で挙げられているような形容詞述語文において「〈一時的状態〉」を明示する例は，2 つの軸のうち「時間的限定性」のほうを明示（あるいは前景化）していると言えるものである。

それに対して，本稿が扱っている飯塚市方言の『トル』は「評価性」の方と関係していると言えるのかもしれない[19]。「評価性」にも議論（樋口 2001，八亀 2003，八亀 2021）があるので，一般に「評価性」を「判断」と読み替えられるのかなどの詳細は稿を改めねばならないが，少なくとも（主に）関係しているのが「時間的限定性」ではないことは確かであり，上述の八亀（2021: 65–66）の指摘が正しいのであれば，本稿の『トル』のような例は通言語的にも珍しいものかもしれない。これも今後検証されるべき内容である。

9. まとめ

本稿では飯塚市方言を対象とし，形容詞およびコピュラに後接する『トル』を取り上げて，それがモダリティを表す『トル』であることを論じた。本稿の議論からモダリティを表す『トル』というものが，アスペクトの『トル』からの連続性は保ちつつ（残しつつ）も成立していると言ってよい段階にあると考える。

通時的にも共時的にも課題は残っているが，今後さらなる精密な記述を行うことはもちろん，複数方言の比較を行うことが必要だと考えている。とりわけ，『ヨル』と『トル』のいずれもが形容詞（あるいはコピュラ）に後接できるような方言の発見に期待したいところである。それによって，過去の方言アスペクト体系を構築する助けとなるだけではなく，アスペクト形式がどのような過程によってモダリティ形式に変化するのかというより大きな理論的なテーマにも貢献できるものと考える。

略号一覧

1	1 人称	DAT	与格	NOM	主格	SFP	終助詞
ADD	累加	FMN	形式名詞	NPST	非過去	SG	単数
ACC	対格	HON	尊敬	POT	可能	THM	語幹母音
ADJLZ	形容詞化	IMP	命令	PRF	完了相	TOP	主題
COND	条件	INFR	推量	PROG	継続相		
COP	コピュラ	JUDG	断定的判断	PST	過去		
CSL	理由	NEG	否定	Q	疑問助詞		

[19]「評価性」に関係するものとして，熊本県で使われる「シャシトル」形式（村上 2004b）や琉球語今帰仁方言の「サスン」形式（工藤（編）2002，八亀 2003）の報告があるが，これらは「形容詞語幹に直接『ヨル』や『トル』（あるいは動詞のアスペクト形式と同形式）が後接している」形式ではないという点が，本稿で扱うモダリティの『トル』とは異なる。

参照文献

青柳孫文（1983）『福岡県嘉穂郡方言集』福岡：第一印刷株式会社.
有田節子（2007）『日本語条件文と時制節性』東京：くろしお出版.
庵功雄（2001/2012）『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』（第 2 版）東京：スリーエーネットワーク.
井上文子（2001）「運動会が「アリヨル」と「アットル」について」工藤真由美（編）『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』科学研究費補助金（基盤研究 (B)(1)）研究成果報告書 51–59.
占部暢勇（2001）『ちくほうの方言集「みそんちょ」』福岡：自分史図書館.
岡野信子（1984）「方言の文法・表現法の記述―福岡県飯塚市八木山の方言調査にもとづいて―」『国文学解釈と鑑賞』49(7): 65–80.
岡野信子（編）（1989）『筑後川流域言語地図』（梅光方言研究 第 7 号）山口：梅光女学院大学方言研究会.
奥津敬一郎（1974）『生成日本文法論』東京：大修館書店.
門屋飛央（2020）『佐世保市宇久町平方言の記述的研究』博士論文，九州大学.
九州方言研究会（1991）『九州方言の基礎的研究 改訂版』東京：風間書房.
工藤真由美（編）（2001）『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』科学研究費補助金（基盤研究 (B)(1)）研究成果報告書.
工藤真由美（編）（2002）『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究　報告書 No. 1』科学研究費補助金（基盤研究 (B)(1)）研究成果報告書.
工藤真由美（2004）「第 1 部　序論　標準語研究を超えて」工藤真由美（編）『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系　標準語研究を超えて』1–76．東京：ひつじ書房.
工藤真由美（2007a）「調査と研究成果の概要」工藤真由美（編）『日本語形容詞の文法―標準語研究を超えて』3–51．東京：ひつじ書房.
工藤真由美（2007b）「愛媛県宇和島市方言の形容詞」工藤真由美（編）『日本語形容詞の文法―標準語研究を超えて』119–146．東京：ひつじ書房.
久野マリ子（2001）「兵庫県播州方言の形容詞につく「～ヨル」」工藤真由美（編）『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』107–112．科学研究費補助金（基盤研究 (B)(1)）研究成果報告書.
黒木邦彦（2015）「第 5 章　形態論」森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦（編）『甑島里方言記述文法書』61–90．東京：国立国語研究所.
国立国語研究所（編）（1999）『方言文法全国地図 第 4 集』東京：大蔵省印刷局.
国立国語研究所（編）（2003）『全国方言談話データベース　日本のふるさとことば集成　第 16 巻　香川・徳島』東京：国書刊行会.
塩川奈々美（2014）「福岡県筑豊地区における方言敬語の記述的研究：飯塚市と田川市にみるシャルの性質」『徳島大学国語国文学』27: 21–37.
下地理則（2020）「方言研究における例文提示法について」『方言の研究』6: 119–141.
住田幾子（1985）「九州方言における「カリ活用」の現況」『日本文学研究』21: 177–186.
寺村秀夫（1977/1992）「連体修飾のシンタクスと意味―その 3―」『日本語・日本文化』6, 1–35．大阪外国語大学留学生別科．（『寺村秀夫論文集 I―日本語文法編―』261–296．東京：くろしお出版に再掲）.
寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味 I』東京：くろしお出版.
徳川宗賢（監修）（1989）『日本方言大辞典 上巻』東京：小学館.
中村京介（2019）「長崎県五島列島宇久島野方言の文法概説」修士論文，東京外国語大学.
仁田義雄（1989）「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志（編）『日本語のモダリティ』1–56．東京：くろしお出版.
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』東京：ひつじ書房.
仁田義雄（2000）「2 認識のモダリティとその周辺」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法 3 モダリティ』79–159．東京：岩波書店.
樋口文彦（2001）「形容詞の評価的な意味」『ことばの科学 10』43–66．東京：むぎ書房.
益岡隆志（2000）『日本語文法の諸相』東京：くろしお出版.
松尾捨治郎（1931）『国文法論纂』（訂正再版）東京：文学社.

松岡葵（2021a）「福岡県柳川市方言の文法概説」修士論文，九州大学.
松岡葵（2021b）「福岡県柳川市方言における Property Concept を表す語の品詞論―動詞との形態統語的な相違点に着目して―」国立国語研究所「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」研究発表会 配布資料，2021 年 6 月 13 日.
松田正義（1969/1999）「九州方言概論」『言語生活』216: 15–27．東京：筑摩書房．（『日本列島方言叢書 23 九州方言考①（九州一般）』17–29．東京：ゆまに書房に再掲）.
松田康夫（1991）『筑後方言辞典』福岡：久留米郷土研究会.
松丸真大（2019）「甑島里方言の文法概説」窪薗晴夫・木部暢子・高木千恵（編）『鹿児島甑島方言からみる文法の諸相』1–46．東京：くろしお出版.
村上智美（2004a）「形容詞に接続するヨル形式について―熊本県下益城郡松橋町の場合―」工藤真由美（編）『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系　標準語研究を超えて』188–203．東京：ひつじ書房.
村上智美（2004b）「熊本方言における「寂ッシャシトル，高シャシトル」という形式について」工藤真由美（編）『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系　標準語研究を超えて』204–218．東京：ひつじ書房.
八亀裕美（2003）「形容詞の評価的意味と形容詞分類」『阪大日本語研究』15: 13–40.
八亀裕美（2007）「形容詞研究の現在」工藤真由美（編）『日本語形容詞の文法―標準語研究を超えて』53–77．東京：ひつじ書房.
八亀裕美（2021）「形容詞述語文のモダリティー―「評価」と「おしはかり」―」『國語と國文學』98(9): 52–67.
吉町義雄（1931）「九州方言の特異性（一）」『九大國文學』1: 49–72.

執筆者連絡先：
熊本県立大学文学部
e-mail: ogwshinji@pu-kumamoto.ac.jp

［受領日　2023 年 5 月 30 日
最終原稿受領日　2024 年 7 月 24 日］

Abstract

Modality Marker "*tor(u)*" in the Iizuka Dialect

Shinji Ogawa
Prefectural University of Kumamoto

Many studies have shown that most of the western Japanese dialects share cognate aspectual markers, collectively called "*tor(u)*." The Iizuka dialect spoken in Iizuka City, however, has two types of "*tor(u)*." One is an aspectual marker and the other is a modality marker. In this dialect, the "*tor(u)*" suffixing to adjectives or copulas expresses a modal meaning, i.e., a speaker's assertive judgment about a proposition in the past. This modality marker "*tor(u)*" has the same characteristics as the typical modality markers.